

JICA シニアボランティア 千葉

SVニュース千葉 第34号

2021年3月3日発行

千葉県JICAシニアボランティアの会
chibajicasv02@gmail.com

本号目次

活動報告会・ 基調講演・報告	1-2
出前講座	3-5
会員だより	5-8
派遣国事情・ 会員の動静	8

第30回 活動報告会を開催

COVID-19の感染拡大のため、本県を含む緊急事態宣言下ではありましたが、当会は、2021年1月29日に感染防止に努めながら第30回活動報告会を開催いたしました。来賓として、JICA東京センター所長 田中氏、同市民参加協力第1課 柿沼氏、JICA千葉デスク 木村氏、浦安市国際センター・センター長 渡辺氏の4名の方々が参加されました。

田中所長のご講演に続いて、帰国隊員3名が報告を行いました。会場に35名の方々（来賓4名、会員20名、一般11名）が参加され、ライブ動画配信に100名の視聴がありました。



基調講演：「コロナ禍における海外活動」

JICA東京センター所長 田中泉氏

2020年は、1月27日中国からの海外協力隊員退避に始まり、3月中旬からは、全協力隊員、専門家、随伴家族等関係者の一時帰国とともに、すべての海外渡航は見合わせとなりました。（100ヶ国以上約5600名が避難という大変なオペレーションでした。）また、来日をしていた研修員も留学等で長期に滞在している者を除き帰国となりました。



2020年末より協力隊員や専門家の派遣については、派遣国の感染状況等を見ながら一部再開し、また研修員も長期に大学等で学ぶ研修員については一部受け入れを再開しました。

2015年9月、世界の国々はSDGs（持続可能な開発目標、英語では Sustainable Development Goals で頭文字をとってSDGsです。）について、国連総会で合意しました。この合意により、貧困を終わらせ、すべての人々が平等な機会を与えられ、地球環境を壊さずに、よりよい生活を送ることができる世界を目指して、世界中が努力することが約束されました。2016年から2030年までの15年間、世界中の国々はこのSDGsの達成に向けて取り組んでいます。17の目標を掲げ、地球上の「誰一人取り残さない（leave no one behind）」ことを誓っています。コロナ禍で社会の分断が進み、難民など弱い立場の人がますます困窮化したり、感染対策に努める人とそうでない人との差が生じたりと様々な課題が明確化し我々はそ

れに対処していかななくてはならないと感じています。

一時帰国を余儀なくされた隊員たちは、協力隊活動の振り返りをおこないつつ、自分に何ができるか考え活動しました。オンラインを駆使して遠隔で任地の指導を継続するもの、また日本の課題に新たに挑戦するもの等、様々な活動をおこないました。

群馬県内では、NPO法人自然塾寺子屋による婦キャベ海外協力隊プロジェクトが2020年5月～10月末に実施され、13名が参加しました。また国内の現場から外国人技能実習生、日本の農業の課題、地方創生等日本の課題についても考え、行動を起こしました。相手の目線に立ち課題を見つけ信頼を培いながら行動し解決していくという海外協力隊のスピリッツは、「持続する情熱」があればいつでもどこでも発揮されると強く思われました。海外での協力隊の活動は期間の区切りがありますが、「持続する情熱」を持ち国内外の様々な課題の解決に、海外協力隊として取り組んでいけたらと思っています。

JICAは、一般社団法人ザ・グローバル・アライアンス・フォー・サステナブル・サプライチェーン（ASSC）と共同で事務局となり、外国人労働者を受け入れる企業及び業界団体、労働組合、市民社会、メディア、研究者らと共に、「責任ある外国人労働者受入れプラットフォーム」を、2020年11月16日に設立しました。

https://www.jica.go.jp/press/2020/20201016_20.html

また、例年開催されるグローバルフェスティバルの代替として、EARTH CAMP (<https://earthcamp.jp/>) や HAPIC (<https://hapiconf.com/>) 等のオンラインイベントが、途上国支援と多文化共生等の国内外の社会課題を共に考えていく活動として行われています。

「アルゼンチン、ポサーダス日本語学校にて日系日本語教師として活動した2年間」 畑野 郁子

アルゼンチンの北部、ミシオネス州、ポサーダス日本語学校で2年間日本語教師をして2020年1月に帰国しました。（アルゼンチンの学校は、3月始まりで12月に学年末。）

赴任時2018年1月には1ドル18ペソだったのが、帰国時は



60ペソまで安くなり物価も上がっていました。今は日本以上にCOVID-19が猛威を振るっていますが、

WhatsAppなどのやり取りでは、特に悲観的にもならず、自分たちのペースで人生を楽しんでいるように思えます。

私はここで日本語能力試験対策のクラスと習字や折り紙など

「ベトナム・フエ工業短期大学 再生可能エネルギー講座新設へ向けて」 多田 ノブオ

フエ工業短期大学の熱冷学科から再生可能エネルギー講座新設に向けて講師に対する支援を要請され、2018年10月に赴任し2020年3月の緊急避難帰国まで現地で活動。

最初の8ヶ月で講師チームを組み、国際再生可能エネルギー機関（IRENA）発行教科書のベトナム語版を発行。途中IRENAの東南アジアワークショップで進捗紹介もして、順調。この教科書の講師勉強会の初回、電気学科の学科長の「こんな教科書は役に立たない…」というような演説で終わってしまい、まさに絵に描いた餅になってしまいました。

一方、当校には2018年4月に韓国KOICAの支援で電気学科に設置されていた、太陽光発電設備を実習に活用する計画で設計図書の収集や再試運転まで進んだものの、担当

の日本文化を教えていました。

ポサーダスの日系人の子どもたちは3世が主ですが、日本語を使う機会がなく話すことが難しくなっています。2世の親御さんたちの中でも日本語を話せる人は多くありません。日本語習得だけでなく日本の文化、習慣、しつけなどを学んでほしいと思って日本語学校を運営しています。行事も運動会やお祭り、七夕、日本料理体験など父兄も協力し合って日本を身近に感じる経験を提供していました。

生徒たち（非日系の子どもも生徒数の半数いました）は、日本が大好きでいつかは日本に行きたいと思っている子たちがほとんどだと思います。JICAが主催してきた中学生・高校生を日本に招く研修をはじめ様々な日本での研修の機会が、どうなっていくのか気がかりです。いつかポサーダスに訪ねて行ける日と生徒たちが日本に訪ねて来られる日を楽しみにしています。

する講師を選任できないと宣言があり、せっかくの設備が「見るだけ」になってしまいました。国際支援による「モノ」の提供が無駄になっていくところを直接見ることになり、情けない思いです。

後半は持ち込んだ商品を使って、「スマートホーム」と「Arduinoマイコン」の学生向けの体験クラスを、週1回開催しました。ベトナム語会話を習ったくらいで技術的な指導ができるようにはならないので、学生に「まず英語を勉強しろ。世界中の情報が今はインターネットでタダ。」とあおりはしましたが、無茶な要求だったと思います。



ベトナム、特にフエの人たちは現状でみな幸せに暮らしている、というのをほんとうに感じた1年半でした。

「コスタリカでの体操競技指導を振り返って」

服部 正

私は、体操競技の指導でコスタリカに派遣され、コスタリカ体操連盟に所属。要請内容は、①体操競技の普及②体操競技の技能向上という2つです。普及面での切り口として考えたことの1つが学校教育との連携です。コスタリカの学校教育は、無償の公立学校、有償の私立学校、そして有償だが援助を受けるコンサルトです。

公立学校はほとんどの場合午前・午後入れ替え制で、課外

活動の時間はありません。体育館や学習用具も完備されておりません。一方、私立学校は全日制で、体育館やグラウンド、室内プールまで完備され、学習用具もそろっており、放課後の活動が可能です。ただ、学費がとても高額で、通



える生徒は限られます。その両方で指導しましたが、普及という観点からいうと、とても難しく感じました。特に公立学校では、活動の時間、場所、道具すべてに無理があり、指導しようというボランティア的な考えも育っていませんでした。最終的には、学校体育を指導する先生方に指導の一部として、体操を取り上げてもらう事が一番の早道だと気づきました。

コスタリカは開発途上国とはいえ、社会制度やインフラがかなり整備されています。政府は自然環境や動植物の保護に力を入れ、特に動植物は可能な限り保護、エネルギーの産出はほぼ100%自然エネルギーといえるほど進んでいます。年間を通して最高気温が25度前後、植物は亜熱帯性で赤や黄色のきれいな花をつけます。人々は争いを嫌い、他人や他の外国人に対してとても寛容で親切に接してきます。そんな国で活動できたことをとても幸運に思い、今後機会あるごとにコスタリカのすばらしさを伝えていきたいと考えています。

出前講座レポート (2020年10月～2021年1月)

「祖先は日本人の兄弟！？未知の国キルギス」

2020/10/24 (土) 袖ヶ浦市平岡公民館

講師：木村明日美 (JICA千葉デスク)

袖ヶ浦市平岡公民館において20名の参加者を対象に講演を行いました。講師が協力隊として2年間を過ごしたキルギスは中国を挟んで日本のお隣さんであるものの、ほとんどの人はキルギスについてほとんど知らず、ネットでも情報は限られています。

そこで、地理的な説明（シルクロードや旧ソ連）や、キルギス人に伝わる「日本人とは遠い昔兄弟だった」という伝説を紹介しました。それから、現地でよく聞く会話例を参加者と共に演じてみて、その意味や内容からキルギスの気候、自然、文化、生活、価値観を紹介しました。その後、SDGsを知っている方が少なかったため、それを簡単に説明をした上で、実際にキルギスに

おける問題を紹介しました。SDGsゴール5に関連する「誘拐婚」の実際の動画をお見せし、講師のカウンターパートの誘拐婚例をお伝えしました。そして日本のジェンダーの問題と結びつけて



(ジェンダーギャップ指数は日本の方が低い)、千葉県の現状(都道府県で唯一「男女共同参画推進条例」がない)もお伝えしたことで、「全く知らなかったキルギスについて知れただけでなく、自分の身近な問題についても考えるきっかけとなった」という感想を頂きました。また、民族衣装や土産物等を展示し、リクエストにお答えして民族楽器コムズを演奏しました。

「モロッコー日本語を教えて」

2020/11/21 (土) 袖ヶ浦市平岡公民館

講師：増田光司

連休中にもかかわらず、出席者はシニアを中心に数名の働き盛りの方々を加えた24名と盛況でした。

地球上の位置、人口、気候などモロッコを概観した後、講師の任地のカディアヤド大学がある一大観光都市でもある、マラケシュ市を紹介。モロッコの人々は母語によりアラビア系とベルベル(アマズィーク)系の2系統に一応大別でき、教育言語としてフランス語、グローバリズムの進展と歩調を合わせる英語、といった少し複雑な言語状況について説明しました。

日本のアニメを入り口として、日本がモロッコの若者の憧れの国にもなっている面があり、アニメにとどまらず日本を知ろう、日本語を学ぼうといくつかの文化クラブが諸都市に作られています。現地

の日本語学習者の特徴として、話すことに非常に積極的であり、センスも良く、中には、インターネット・サイトで自学自習し、発音の良い日本語を話す方もいます。日本語学習熱も高く、同大の公開講座では每期百名を超える学生が入門講座に学んでいます。しかし、学習段階が進み「読み書き」が必要になると、学習者の数は大幅に減ります。日本語の「読み書き」の難しさが、学習の進展のネックになっているためです。

モロッコの生活など諸々と、日本人とモロッコ人の比較など、会場と質疑応答を交えて、考え、意見を述べ合いました。写真を交えてモロッコの食事情を紹介しました。



「海外の人々の暮らし」

2020/12/10 (木) 市原市八幡公民館

講師：江田隆正

「いきいき八幡宿」の人権講座において13名の受講者の方々を前に、講座が行われました。講師がこの会場付近に中学生の頃4年間住んでいたことが話され、和やかな雰囲気の中で講座が始まりました。

仕事の関係で約40年前にUAEに4年間滞在した経験から、「いつかは、日本と他国の人々に恩返しをしたい」と思い、協力隊に参加するきっかけとなりました。任国グアテマラと日本や他の



国々とを対比しながら、任国事情(グアテマラの

地理、歴史、宗教、人種構成)について、スライドを用いて説明がありました。

綺麗な校舎の私立学校とみずばらしい公立学校の差異、私立学校では子供たちには制服があつてきれいな服装をしている等、訪れた小中学校の写真を交えて、グアテマラの社会、格差のある現実について説明がありました。続いて、欧米からの寄付による学校建設という寄付慣れ状況、教師になるシステムそのものもない状況についての説明がありました。

また、自分が強盗の被害にあつた経験談から、貧困からくる犯罪は常にあると話され、「身を守るな、命を守れ。」「旅の安全は、金で買え。」「一番安全な国は日本。」と話されました。

受講者の方々が、グアテマラの人権の現実と日本の恵まれた人権を考えるきっかけになったと思われます。

「シリアはまるで人類史博物館」

2020/12/19（土） 袖ヶ浦市平岡公民館

講師：高瀬義彦

袖ヶ浦市平岡公民館主催『国際理解セミナー』の第3回目として、本講座が開催されました。



JICAシニア海外ボランティアに初応募し派遣前研修を受けました。新ODA大綱に新たに記述された「人間の安全保障」と異文化理解講義で学んだ

「文化相対主義」は重要だと理解しました。

赴任先のティシュリン大学工学部メカトロニクス学科で行った仕事は、講義、ダマスкас大学、アレppo大学等での講演、学生プロジェクト援助などです。先生方の実家に何度も招待され、郊外の住民生活に触れたり、多数の古代遺跡に案内してもらいました。外国人にも普通の友人のように接するシリアの方々の態度に驚き、その文化の背景を知りたいと思いました。

シリア人は大シリア民族の誇りを持っていると聞きました。大シリアとは古代から続く歴史的シリアのことです。メソポタミア文明と

ギリシャ文明が会いヘレニズム文化が誕生、その後、ローマ帝国に支配されました。シリアにはパルミラ遺跡を始め、聖書に関係する文化遺産などが沢山現存します。7世紀にイスラム圏に入り大モスクが、その後十字軍の侵攻が続き、築城技術の粋を究めた城が建造され残っています。シリアは各時代の遺跡や遺産を擁する、まるで人類史博物館です。現在シリアは、イスラム文化とキリスト教文化が共存する社会になっています。シリアで異文化に接して、お国柄を認め合い平和と発展に貢献する事が大切だと気付きました。

帰国後、2011年3月にシリア内戦が起こりました。平和だったシリアで、なぜ「アラブの春」が「内戦」になってしまったのか？シリアは人類史の縮図とも言える争いが歴史上勃発した地にある。初期はデモ行進などの市民抵抗運動だったが、武力戦闘に発展し反政権派諸勢力の中で外国人を含む過激派ISILが台頭した。アサド政権と反政権派それぞれに同盟組織や国が資金援助や武器付与等の軍事支援を行って複雑化し深刻な長期内乱になった。シリアで3年間実生活を経験した個人として、今後もJICA活動で学んだことを心に留めてシリアと接していこうと考えています。

「素敵なパラオの人々」

2021/1/19（火） 柏市高田小学校

講師：中村時夫

柏市立高田小学校6学年の児童を対象に出前講座を行いました。当初は、全児童が午後体育館に集い開催される計画でしたが、午前中の2, 3, 4時限の3回に分けて、各クラスの教室で実施されました。受講者は学年全体で105名でした。



最初、パラオはどこにあるのか確認。サンゴ礁の美しい海に恵まれた明るい島の人口は、1万8千人弱で、おもな産業は観光。戦前の日本の統治時代首都コロールは、日本の南洋統治の中心地として栄え、今でも流暢な日本語を

話すお年寄りも沢山います。

派遣は2008年3月～2010年3月（2年間）。現地の教員に、学力向上を目指すには生徒のやる気を引き出し、自信を持たせることが、レベルアップにつながることを具体的に表やグラフを使って訴え、専門の数学では九九の暗記を徹底して指導。現地生徒に九九のテストを繰り返しても満点者がいなかったの、成績優秀な生徒に黄色いTシャツをプレゼントして励ますなど工夫をはかりました。

パラオ共和国は1994年に独立し、アメリカをはじめ日本や台湾からも各種の援助を受けています。パラオの周回道路や日本援助による日パ友好橋も紹介。また被爆した第五福竜丸や、ペリリュー島に今も残る大砲や戦車、上皇・上皇后が訪れた慰霊碑なども紹介。高級ホテルやデパートが出現し、観光客も12万人が訪れるまでに発展しましたが、昨年突如襲った新型コロナウィルスのパンデミックの影響で激減、収束が待たれるところです。

八街国際理解市民大学

八街国際理解市民大学は、八街市のご協力の下、千葉県JICAシニアボランティアの会と一般社団法人国際教育交流センターの共催により、「広く海外の社会・文化に関する経験を共有し、地域社会において外国人との共生社会の実現に向けて社会貢献すること」を目的として開設されました。

2020年度の八街国際理解市民大学は、12月～3月まで毎

月1回開催される予定でしたが、新型コロナウイルス関連の要因により、第2回目と第3回目は中止となりました。



第1回 2020/12/19 (土)

記念講演1 「国際交流と野球」

講師：吉田昌弘（国際教育交流センター会長）

国際野球連盟の一員として、フィリピンで実施された中高生野



球交流の様子について、当時の写真を交え紹介。当時の野球連盟会長の野村克也氏とのスナップショットなどもあり、楽しい雰囲気は伝わるものとなりました。

記念講演2 「ブータン王国から見た幸せとは」

講師：三輪達雄（当会会長）

単なるブータンの紹介やご自身のボランティアとしての活動内容の報告にとどまらず、ブータンが幸せの国と言われる理由を独自の視点から分析し、興味深いものでした。仏教国家として人々がもつ殺生や輪廻転生などから見られる生命観を紹介し、日本人が今、失っているものは何かという問題提起を示し、有意義な講演でした。



会 員 だ ょ り

会員だよりご寄稿へのお礼

今号でもコロナ対策のため出前講座等の行事が取りやめとなり、記事が集まらないという問題がありました。紙面を削減するより、この機会を利用して広く会員の皆様からの近況や面白いお話等を掲載させていただきたいということで、「会員便り」の寄稿をお願いしました。面白く有益な記事を寄稿された方々に感謝いたします。

また、次号でもこのような状態が続くと思いますので、会員の皆様には、今後ご寄稿をよろしくお願いします。

「途上国援助の効果」と「日本文化の価値の高さ」の再認識について

影山 洵

昨今、自分の人生を振り返って、いろいろ思い出すことがたくさんありました。以下はその一部ですが紹介します・・・。

私の父は、幼くして両親を亡くし、単身北京に留学後、日本の国が設立した上海の東亜同文書院で中国語の教授をしていました。その関係で家には、いつも外国人がいるような子供時代を過ごしました。戦後、九州の大学で商業英語を学んだ私は、外国と触れる仕事をしたかったので、商社に入りました。55歳の時、たまたまJICAのシニア海外ボランティアの募集を見て応募し、縁あって、JICAの仕事でサモアとジャマイカに駐在しました。その中で、一番素晴らしかったのは、サモアでした。そこでは、JICAのサモア人の帰国研修員同窓会（SJAA）を創立しました。

当時JICAの研修で日本に行ったことのあるサモア人のOBは300人いました。留学後、彼らはサモア国内の警察、税関、医院、大学など重要部門で勤務し、国を代表して活躍していました。SJAA設立後、会員の発案で、独立記念日に国王の前でパレードを行いました。（写真）その後、私達のシニアボランティアの1人が、カタツムリの寄生虫に感染し、すぐにニュージーランドの感染症の専門病院に緊急搬送しなければならないという事態が発生しました。この時、チャーター機の手配は事務所が行い、患者の診療、通関手続き、同乗医師の手配、看護師の手

配等はSJAAの会員が迅速にやってくれました。OB会のプロ集団の特色を発揮しました。その他、OB会の協力としては、埼玉県入間市の小学生からたくさんの寄付の学用品が送られてきましたので、その配送をしてくれました。大量でとても自分たちの力では配り切れないという状態となりましたが、同窓会員のおかげで、5つの小学校に無事届けることができました。

私は、帰国後、上海の交通大学で中国語を学びましたので、今は、千葉県の小学校で中国語を活かして、中国語を母国語とする中国人児童に対する学習支援のボランティアを行っています。現在、日本語と日本の文化を並行して外国人の子供たちに教えています。日本には様々な風俗習慣等素晴らしいものがありますが、言葉と文化は一体化しており、特に日本の「礼儀作法」「礼節」「真面目さ」「集中力」などは素晴らしい文化だと思います。日本の授業のように、「礼に始まって礼に終わる」、「休み時間を10分間取る」というメリハリのついた授業は、「集中力を高める素晴らしいノーハウ」だと思います。

海外の途上国では、“Tomorrow”や“No Problem”と人生の苦境脱却の方法があり、自然界では「冬眠」というサバイバル手段があります。帰国後、「広い世界と自然界を見ると、それなりにその深い意味と解決策があり、その真意を理解できるようになりました。



外人案内ボランティアをするにいたった経緯

加藤 哲夫

発端：ある日新聞を見た、内容；アラブの春に始まった内戦の煽りで、国を避難してきたクルド人が間違っ成田空港に来てしまった。言葉もできず行く宛もなく困っているとの記事。その難民の顔にハッとした。シリアで泊めてもらった人に似ている。

直ぐに新聞社から始め蕨市役所、川口のクルド人協会を訊ねた。該当する人は直ぐに分かった。彼は与野に住んでいる、聞いた電話番号に掛けたら不自然な日本語の応答がきた。今は出かけているという、帰ったら電話欲しいと伝えて家に帰った。



電話がないのでこちらから電話したが、応答がない。1週間くらい待ったが繋がらないので諦めた。彼は私が世話になった人ではないと感じたが、親族の可能性もある、しかし通じないので、受けた恩は他人に返すの原理で、困った人が来たら援助したいとの思いで、成田空港案内ボランティア組織（SKYLETS）に入会した。

この組織は東京外大に留學生を案内するのが主で、これは

学校の入学時期に限り、残りの時期の活用の為、成田空港案内ボランティアに応募し、週一回空港の案内ボランティアを続けてきた。

ここではいろいろな国の人が来るので短い会話しかできないが、無料の会話教室だ。中国語、韓国語はできないが、多くの人がスマホを見せて聞くので大体案内できる。

案内は相手が完全に目的を達成するまで付いていく事になっている。その間の会話が楽しめる。基本は英語で始めるがスペイン語圏の人も来るので会話の実習ができる。屯していた人たちを見つけたので話しかけたらインドネシア人だった、私はインドネシアでクルブック（デンプン粉を使った食べ物）の品質改善に携わった等を話していたら、カバンから本物のクルブックを出して頂いた。

更に手を広げて流山市善意通訳ガイドにも登録し、年5回くらい案内した。ここでスペイン語のできるのは私1名なので西語圏の人の案内は全部私にくる。年5回といえども、問い合わせから、コース調整、ホテル出迎え、当日の案内等で結構時間がかかる。シリア人に合った事はない。

お世話になったクルド人ユスフさんの消息は気懸りだが知ったとて何も援助はできないだろう、受けた恩を返し切れていない。

コスタリカでスリにあう

大西 輝明

2008年1月から2か年間、シニア隊員として中米コスタリカの首都サンホセに赴任した。当地の警察署からは、集団で働くスリには充分注意するように、とのお達しはあったのだが、その実態に関しては不明であった。前任者からは「ポケットに手を入れて、堂々と財布を抜き取られたこと」や、「その感触を感じつつもなにも抵抗できなかった話」などを聞き、なにをバカな、一体それはどうということなのかと疑い、自分もまた、そんなことに遭遇することになるかも知れぬと恐れ、さらに密かにそうした体験を期待するところもあったのだ。

だれしもその地に慣れぬうちはキョトキョトと用心するのだが、慣れればしだいに無頓着になる。スリに襲われるのはそういうときだ。コスタリカでは背負ったディパックのジッパーを後方からあけら



れ、中身を盗られそうになったことが三度ある。そんなことは日常的で、集団スリにあったことが二度、独り者のスリ被害が

二度、いずれも相手がだもうけをしたと言うほどの被害ではなかったのだが、かれらの活動は実に活発でこまめである。中南米ではスリは一種の職業でもあるのかと思った。私が二度目の集団スリにあったのは、あと一ヶ月ほどで任期終了となる12月、サンホセ市でのFiesta del Luzという、クリスマス前のフェスティバルの夜間見物においてである。

このお祭りの昼の部、夜の部ともに、車侵入禁止となったコロン通りを踊り子が踊って歩き、沿道は早朝から場所取りをした見物客でうずまる。そうしない見物人は座る人々の後方を通って通りに平行に移動するのだが、通路は狭くて夜間は薄暗く、ひと一人がどうにか通れる程度の流れとなる。人のながれが滞留すればそこで人の塊ができることになるのだが、それを力ずくで突破しつつ移動することになる。そのとき私は押し合いへし合いする一つの「人の塊」を通り抜けようとして立ち止まったのだが、後方からの他の人の圧力で、はからずもその塊中にまぎれこんでしまったのだ。一旦そうなってしまえば、信じがたいことだが前後左右なにやら掛け声などをかけて強力な圧力で押すのである。そのため身動きができない状態となってしまったのだが、これを抜けるには一体どうすればよいのかと戸惑ううち、私のジーンズの後ろポケットに他人の手指が侵入する感触があり、咄嗟にこれはスリだと直感した。

力任せに下半身を動かせば、次は前ポケットに侵入して気持ちわるく探るのだ。これが人々の言う「無抵抗状態中の被災」

なのかと気づき、なるほどと納得したのだが、この「初体験」に感動はない。どうやら手は後方から伸びているらしく、むりやりに振り向けば日本のお笑い芸人某のような男のペラっとした顔がそこにあった。この某も周囲から押されて身動きは極めて不自由らしいのだが、しだいに私から離れ、最後にニッと笑って暗闇へ消えた。とたんに不思議なことに周囲からの圧力は消え、まるでテレビドラマのシーンのように周囲の喧騒も蘇り、私は今までの塊から開放されて見物人の流れに流入することができたのである。むろん前ポケットに入れていた小銭入れはなくなっていた。

要するにこれが集団スリであり、この場合の集団数は約十名、彼らが押しくらまんじゅう的手法で被災者を身動き出来ぬ

状態にしておいて、仲間の一人がポケットに侵入するというのが手口なのである。はじめに後方から私をこの塊へ押し込んだのも、仲間のひとりであるに違いない。仕事が成功した場合はにっこり笑って挨拶するといった相手を愚弄する挙措や、仲間はすぐに雲散霧消して散らばるといった機敏性もまた憎いところである。

このときの被害はたいした額ではなかったので、彼らには悪いことをしたかななどと考えたりもしたのは、いかにもお人好しである。こうして私は一ヶ月後、「貴重な体験」をして満足し、帰国したのである。

マレーシアで出会った懐かしい人たち

黒田 昭太郎

受話器を取り上げると、直ちに「アパ カバ、元気ですか」と威勢の良い声が聞こえてきます。ニックさんです。マレーシアを離れて何年も経つのに、今だに電話をくれています。

私はマレー半島東海岸、タイ国境に近いクランタン州コタバルにある政府農業開発公社に派遣され、熱帯低地での野菜の有機栽培試験に従事しました。現地は太平洋戦争勃発時、最初に戦火を交えた地点とは知っていましたが、事前学習でさらに多くを知ることが出来ました。マレー系、中国系、インド系、土着系の多民族国家であるマレーシアの中で、クランタン州は特にマレー系が多く95%を占め、州政府はイスラム原理主義政党が選ばれていること、工業化が遅れ農業が主産業となっていること、マレー半島の伝統芸能・工芸が残っていること、休日が日曜日ではなく、イスラム教の礼拝の日である金曜日であること、などです。イスラム社会での業務、生活に全く経験がなかった私は多少の不安と未知との遭遇への期待が交錯した中で赴任しました。

しかし、着任早々にマレー系の職員の人々が、入れ替わり立ち代わり私の部屋に訪れてきて、「日本に研修に行った、北海道へ行った、つくばに行った」など日本語交じりの挨拶を受け、事前の心配はすぐ消え去りました。政府のルックイースト政策で、日本に研修に派遣され、知日、親日になって戻った職員が多くいるのです。職場の皆さんは総じて穏健・真面目なイスラム教徒で、朝礼ではお祈りから始まるのが常でした。同室のアジッドさんなどは、勤務の傍ら休日のたびに、ジャングルに棲む先住民（オランアスリ）にイスラム教義の布教に出かけていました。

イスラムの社会は太陰暦と月の運行で動いています。イスラム暦9月がラマダンです。最初の新月を確認した翌日、日の出前から日没までの間、食べ物も水も摂らずに断食（プアサ）をし

ます。「暑い日中、水も摂らないで大丈夫か」とカウンターパートのハジ・アジスさんに尋ねたら、「頭が冴えて、心が清らかになる、トライしてみても」と逆に勧められたこともありました。

ラマダン明けのハリラヤは日本のお正月で盛大に祝います。ジェネラルマネージャーのハジ・ハッサンさんの自宅に招待されました。多くの女性職員がマレー服の盛装で集まっていて華やかでした。後日、ジェネラルマネージャーの部屋に無農薬で栽培したキャベツを持ってお礼に訪れたところ、「安全で美味しい」と目の前で葉をちぎって試食してくれました。その際、ハッサンさんは、子供時代、戦後の荒廃時にあたり、学校に行けなかったと往時の思い出を話してくれました。

その他、多くの人たちとの交流がありましたが、なかでも思い出すのはフセインさんとニックさんです。

フセインさんは定年間際のベテランで日本研修経験あり、夫人もJICA専門家が派遣されていた試験研究機関に勤務されていたとかで、日本人をよく理解され、本当に親切にしてもらいました。よく自宅に招待されたのですが、200坪以上はありそうな広い庭に熱帯果樹が各種植わっていて、マンゴスチン、ランブータン、スターフルーツなど収穫、賞味させてもらいました。ドリアンの成熟期には再び招待してもらい、果物の王様を大いに味わうことが出来ました。お二人とも気配り上手で、居心地よく、お言葉に甘えて、私の家族がマレーシアに来た際、熱帯果樹の見学と果実の試食に訪問させてもらいました。そのうち、お嬢さんの結婚式にも呼ばれました。

もう一人は、ニックさん一家です。かつて王族であったことの尊称であるニックさんは当時、三十代後半の働き盛り、活動的、外向的な人柄で、日本で1年間農業実習をしたこともあり、日本語が上手でした。彼からも度々家に招待され奥さんの日本人向きの料理をご馳走になり



ました。コタバルを離れてから5年ぶりに、同じシニアボランティア
仲間のYさんと再訪した時は、一家を挙げて歓迎してもらいま
した。（前頁内写真）大家族の一家で、昔の日本を思い出しま

した。

今後ともこのような親日的なマレーの人々とのお付き合いを大
事にしていきたいと思っています。

派遣国事情

コロンビア 職種 鉱業

『日本と違うところ』 半田 滋

私は2020年3月まで新型コロナの感染拡大で帰国するまで
1年半、南米コロンビアで炭鉱からの廃水処理改善のための活
動をしていました。

『南米』=『暑い』というイメージがあるかもしれませんが、南米
大陸の背骨に例えられるアンデス山脈上の街はそうではありませ
ん。各国の首都を見てみますと、コロンビアの首都のボゴタは
2,640m、エクアドルのキト2,850m、ボリビアのラパスにいた
っては3,640mと登山をするような標高に位置しています。私の
赴任地のソガモソも北緯5度と赤道に近いにもかかわらず、標
高2,560mにありますので一年中日本の春のような気候で過
ごしやすいところでした。

この高い標高と低い緯度による日本との違いも経験したので、
ご紹介します。

●お湯は100℃では沸かない

現地では自炊をしていました。コロンビアのお米は細長いイン
ディカ米なので炊くのにコツがいります。地元の人に炊き方を教
わったのですがうまくいきません。富士山でご飯を炊くと芯があっ
ておいしくないと、よく聞きますので、実際に沸騰する温度を測っ
てみたところ91.5℃でした。気圧の違いが影響していることを実感

することができました。ボゴタ在住のシニアボランティアは炊飯器の
蓋に重しを載せて工夫をしていました。美味しく炊けるそうです。

●木の年輪はない？ある？

一年中春のような陽気で日照時間の変化もあまりないところ
では、日本と違い植物は一年の変化を感じず、年輪を作らない
だろうと思っていました。任地の周囲にはユーカリの木が多く、炭
鉱の補強材としてそれを活用していたので、観察する材料は豊
富でした。結論から言うと、『ある』でした。但し調べたところ『年
輪』ではなく、雨季、乾季による成長速度の違いによる『季輪』
があることがわかりました。

まだまだ『日本と違う
ところ』をご紹介したい
のですが、ご興味あれ
ばJICA海外協力隊
の世界日記でご覧く
ださい。



<https://world-diary.jica.go.jp/handashigeru/>

世界日記のブログを拝見しての感想（編集委員）

世界日記は、掲載を希望するJICA派遣者の公式ブログで
す。他の例と同じように、現地に着いてからのイベント等に合わ
せて、たくさんの記録が掲載されています。

特に、面白かったのは、筆者の派遣までの家庭劇でした。

・2020年10月から2021年2月末までに、次の方々より当会に合計14,400円のご寄付があり、品物のご寄付もありました。
大変ありがとうございました。
現金:増田光司、江田隆正、高瀬義彦、三輪達雄、中村時夫、多田ノブオ、服部正、畑野郁子（敬称略）
イベントの景品用品物:酒井國彦（敬称略）

●当会会員の皆様、総会にご参加ください 2021年5月15日前後を予定

4月になりましたら、改めてメールにて連絡を差し上げます

会員の動静

会員数 94名（2021年2月末現在）

これまで派遣されたシニア隊員は、全員帰国しました。また、
2020年2月以降に派遣予定だった方々は、派遣を見合せてお
ります。

2020年10月1日から2021年2月末日までの間に帰国された
方は次のとおりです。（敬称略）

・麻生 伸彦	（茂原市）	バヌアツ	コンピュータ技術
・岩井 潮里	（千葉市）	ソロモン	栄養士
・小澤 彰	（八千代市）	ニカラグア	数学教育
・島中 一俊	（千葉市）	ミャンマー	コンピュータ技術
・多田 ノブオ	（千葉市）	ベトナム	再生可能エネルギー
・服部 正	（八街市）	コスタリカ	体操競技
・半田 滋	（市原市）	コロンビア	鉱業

・退会に際しましては

名簿の誤りを防ぐため、退会届をWebサイトからダウンロードし、記入後、電子メールか郵便で当会事務局宛てにお送りください。